【①改築】河川空間とまち空間が融合した良好なネットワークの形成

1．目標

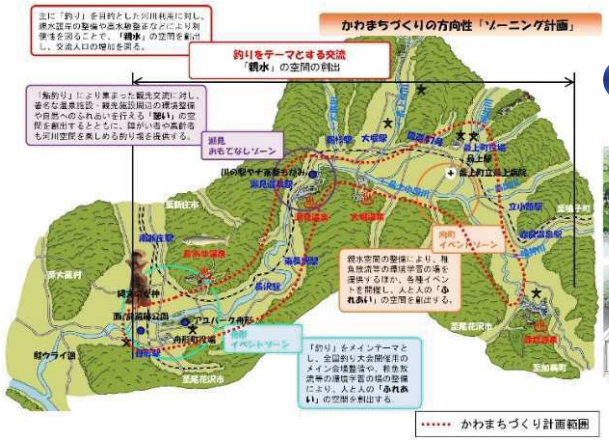
【現状】

➢最上小国川は最上町及び舟形町の中心を流れる河川として、最上町賛歌や中学校校歌にも名称が出てくるなど、地域から親しまれている。

➢平成27年4月より最上小国川清流未来振興機構（行政・産地協議会・漁協・温泉組合・観光協会などで構成）が組織され、治水対策だけでなく、内水面漁業の振興や地域資源を活用した交流促進による観光振興により、最上小国川流域の地域づくりを推進。

【目標】

➢古から築かれてきた最上小国川の清流としての魅力や価値を継承しながら、地域資源に新たな魅力と価値を加え、川とまちとの良好なネットワークを形成し、地域交流の創出を図り、観光交流などの地域活性化を推する。



整備イメージ

▼計画の成果目標と実績

計画の成果目標	H31	R5	実績
鮎の漁獲量を23,111kgから34,700kgに増加させる	23,111kg／年	34,700kg／年	20,666kg／年
イベント参加者数を5,215人／年から8,000人／年に増加させる	5,215人／年	8,000人／年	1,668人／年
地域内の観光者数を93万人／年から150万人／年に増加させる。	93万人／年	150万人／年	86万人／年

2．事業の内容

➢事業の期間：平成31年度～令和5年度（5年間）

➢事業の主な内容

〇基幹事業

・舟形イベントゾーン：河川管理用通路整備、高水敷整地

・瀬見おもてなしゾーン：スロープ整備

・向町イベントゾーン：親水護岸整備、河川管理用通路整備

➢事業実施主体　：　山形県

➢事業費

	県
基幹事業	2億5,800万円

3．事業による成果

≪最上小国川　ハード対策≫

➢ 各ゾーンにおいて計画的に事業を進めた結果、事業期間内に整備を完了することができた

➢ 舟形町イベントゾーンでは、鮎釣り甲子園が開催され河川の利活用が図られた

➢ 瀬見おもてなしゾーンでは、令和5年度の道の駅オープン前にスロープ整備が完了し、利活用が図られた

➢ 向町イベントゾーンでは、引き続き最上町による高水敷の整備を実施しており、その後の利活用が見込まれている

（舟形町イベントゾーン）
鮎釣り甲子園の開催

4．評価と今後の対応

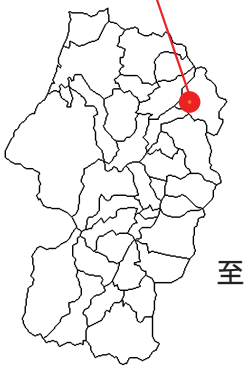
着実な整備推進を図ることができたものの、新型コロナの影響により各イベントの自粛やその後の河川の利活用の回復が伸びていないことに起因し、目標を達成することができなかった。

しかし、今後向町イベントゾーンでは最上町による新たなイベントの企画も予定されており、今後も地域と一体となり最上小国川の利活用に向けて協力を図っていきたい。

5．整備効果事例

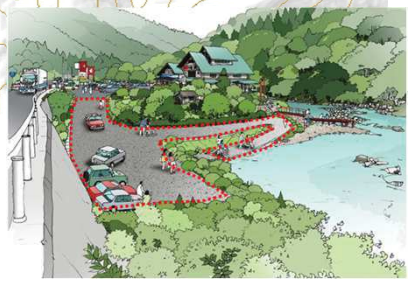
【事例①】瀬見おもてなしゾーン

（山形県事業）



最上町瀬見地内

スロープ整備：1箇所



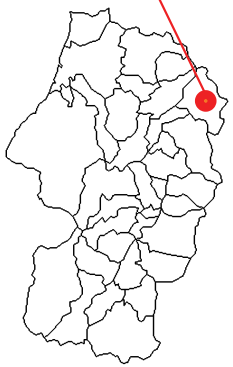
➢スロープの利用は少ない

➢道の駅のオープンもあり、川に近づく利用者が増えた

【地域の声】
・今までは川へ近づけなかったが、川へのアクセスが良くなったことで涼を感じやすく立ち寄る頻度が増えた。（地域住民）
・駐車場があることで釣りなどの利用がしやすくなった。（地域住民）

【事例②】向町イベントゾーン

（山形県事業）



最上町向町地内

親水護岸：L=420m

➢河川は利用されていない

➢今後高水敷の整備により河川の利用が見込まれる

【地域の声】
・高水敷が広く活用できるようになり、今後イベントを検討したい（最上町役場職員）
・階段護岸が整備されたことで川に近づきやすい。（地域住民）